

ネット 漂流

狙われた子どもたち

Vol.54



子どもにも影響するフェイスブックの個人情報流出事件

ネット情報技術推進ネットワーク株式会社
篠原 嘉一（しのはら・かいち）

フェイスブックで個人情報が流用されたと4

月初めに報道された。全利用者に悪用のリスクがあると記事が出たことで、安心して利用してきたフェイスブックが……と思われた方も多いだろう。全世界のユーザーが対象ということで逆に「私は大丈夫」と感じる人もいるかと思う。しかし、記事に書かれたように、フェイスブックから同意を得て、性格診断アプリが、フェイスブックの個人情報にアクセスができたことで、得た情報を流用してしまったのだから、登録した個人情報は既にいずれかに流出している。

一見、子どもには関係のない事件に思えるが、現状から言えば、小学生もフェイスブックにアカウントを持っているのだから、無関係ではない。保護者は、「子どもたちは、まだフェイスブックなどしていない」と思われているのだが、LINEの登録や他のアプリの登録にフェイスブックで登録している子どもは案外多いのだ。フェイスブックに投稿はしていない。登録をしているだけ。だから、親が聞いても「フェイスブックは使っていない」

と言う。

LINEの開設が一般的になった現在では、小学生の一部もLINEで家族や友達と連絡などをしている。スマホを購入し、電話番号を持っている子どもなら直接LINEが開設できるが、WiFiモデルの端末ではLINEが開設できないため、フェイスブックをまず開設し、その会員アカウントでLINEを開設する。LINEだけではなく、最近のアプリは、他のSNS会員情報を使って登録ができるようになってきた。Googleやフェイスブックのアカウントがあれば、簡単に他のアプリの登録ができるのだから、個人情報アプリ間でもつながりを持つてしまふ。

大人ほど個人情報を詳細に書き込んでいないが、入会時に表示される個人情報入力欄は一通り埋めている。広告表示が目的で回収するデータである以上、個人の趣味趣向が蓄積され、広告として自分にふさわしい広告が表示される仕組みのだから、子どもには子どもの好む広告

が表示されるようになる。

そこで、ゲームの検索をしている子どもには、ゲームの広告が増え、大人びた検索をする子どもには、アダルトな内容が出はじめる。悪意のある事業者であれば、あらゆる世代の趣味趣向や誰とつながっているか、位置情報や行動記録はどうか、を利用してしまふ。子どもたちまで大人の利益のために利用されてしまふ。得なくていい情報まで広告として目の前に表示されるのだ。

昭和の時代は、「子どもにはまだ早い」という言葉があった。これは子どもが情報を得ようとしていることが、大人に分ったから注意ができたのだが、今は大人の気づかないところで子どもたちは直接情報を得ている。

アナログな経験を積んできた世代は、自分の趣味趣向に合わせた広告の表示は便利だと感じるが、幼い頃からネットの広告とテレビや新聞の広告とは仕組みが違うことを知らない世代は、意識すらしない。各地の学校を訪問するたびに、興味のある事柄だけ見続け、異常なほど専門知識が高い子どもと出遭う。偏った情報に振り回されていることを保護者は気づいていない。保護者が危機感をもって相談に来られる家庭は、ネット依存の症状が既に出ている。

今回のフェイスブックから流用された個人情報で、子どもたちも広告攻撃を受ける。何より、フェイスブック以外の子ども向けアプリも同意を得て個人情報を集めているのだから、なぜアプリが無料で入手できるのかを、子どもたちに伝えなければ、無防備な大人をつくってしまうのだ。せめて、スマホは初期設定のまま使っていけないことを理解してほしい。